

令和元年 9 月 26 日

(公財) 北海道サッカー協会 各位

北海道レフェリーアカデミー事業報告書

報告者：高橋 海星 (函館)

<日時>令和元年 9 月 14 日 (土)・15 日 (日)

<場所>中札内交流の杜・ホテル ピアセブン・中札内村文化創造センター

<参加者>インストラクター：古曾部 統太郎 氏、伊藤 真也 氏、岡田 渉 氏  
審判員：小松 祐也、高橋 海星、田口 平蔵、牧田 隆史

9 月 14 日 (土)

8 : 4 5 集合

10 : 00 試合実践① U18 道東ブロックリーグ 1 部 R : 田口 4th : 小松  
帯广大谷高校 VS 帯広緑陽高校

自己分析：マネジメントにおいて、今回の試合では警告はなかったものの、映像を見て警告を出すべき場面があった。特に前半 20 分の緑陽 8 番が大谷 14 番に対するアフターファウルの場面ではファウル自体は判定できているもののマネジメントする際にも犯した選手を逃がすことなく再開の準備が整ったとしても、毅然とした態度で注意をする、あるいは警告を示す必要があったと考える。また、後半でも 22・27 分の事象(キッキング)についても同様の対応をすべきだった。パーソナリティの観点でもこの部分が出来ていなかった。



また、チームワークにおいて、第 4 の審判員が交代ボードに 23 と記入したがうまくセッティングできていなかったため、声を出して主審である私から訂正することで副審、本部にいらっしゃる役員・スタッフ、応援に来ている方々全員が分かりやすいように主審がリードすべきであった。

INS 分析：選手のクイックリスタートに対して注意が少ないため、動いているボールを蹴る→やり直しという場面が何度かあり、主審として先にコントロールを心がけたい。FK のマネジメントはスムーズに行えているが PK マネジメントでは、時間をかけすぎていることと、主審のポジションを確認したい。

動きとポジショニングに関して、試合開始から動こうという意識は十分に伝わった。全てではないが攻守の切り替えを早く感じ主審もそれに合わせた動きもできるようになってきていると感じる。副審サイドに寄るタイミングが悪く結果的にクロスが上がった後に串刺しのポジションになることが多かったように思う。ボールが自分の方向に移動してきた時にポジションを修正できていない場面では、もっと早い段階で出し手と受け手を認識できれば改善できる。ボールが低い位置で展開されている時や GK がボールをコントロールしようとする場面で FW がアプローチをかけることに危機感が感じ取れなかった。

そして、この試合で一番大事なこと、自己評価にも記されたように、第4審判の交代ボード入力ミスに対する主審の対応である。主審が第4審判のミスはミスと感じさせないようにすること、第4審判に対しても仲間なので敬意を示すことがもっとも重要である。

12:05 試合実践② U18道東ブロックリーグ1部 R:高橋 4th:田口  
白樺学園高校 2nd VS 帯広柏葉高校

自己分析: 判定は試合を通して一貫していた。動きとポジショニングでは、何となくこの辺にいれば大丈夫だろうと安心していることが多く、なんとなくでポジションを取っていたことが多かった。感覚的にポジションを取ることもあるが、基本原則として、何を見るのかを考えポジションを取る必要があると感じた。

INS分析: 後ろから競り合いで押す行為は、視野外でのプレーでありズルさがある、時間稼ぎをしているチームからボールを奪おうとしている選手はどんな気持ちでボールを奪いに行くのかなどの意図が感じられればマネジメントできたのではないかと。FK マネジメント時に、先にボールのポジションを指示して、壁の距離をある程度離しておけば、素早い再開ができた。警告を出す選手を間違えそうになったシーンでは、ファウルをした選手をしっかりと目を残す。

14:10 試合実践③ U18道東ブロックリーグ1部 R:小松 4th:高橋  
帯広三条高校 VS 帯広北高校 2nd

自己分析: 判定基準は一貫していた。動きとポジショニングでは、細かく繋ぎ崩していくサッカーと広くスペースを使い攻めるサッカーの試合であったが、同じポジション取りや動きをしてしまった。ステップワーク、特にバックステップを上手く使えずに首を振る事が多くなってしまったので、スペースを空ける際にバックステップを使い、首を振らずに広い視野で監視できるように意識していきたい。



INS分析: アドバンテージの適用はチーム戦術を考えており、積極的での的確であった。首を振って監視したり情報を得ることは悪いことではないが、その分死角が増える。体の向きやステップワークで視野を広げる動きを意識する。主審サイドの横の幅がもっとあるとより監視しやすくなる。

16:05 夕食・移動

17:30 試合振り返り

18:30 審判員プレゼン

高橋より、沖縄県で行われたインターハイ全国研修に参加して学んだこと、牧田より、アカデミー集合研修に参加して学んだことの発表を行った。



19:10 フィジカル講義

岡田インストラクターより、Warm-up についての講義があった。Warm-up には温めること、準備運動などの意味があり、効果として柔軟性、関節可動域の向上、動作の予行、精神的な準

備などが挙げられる。また Warm-up を行う際に大切な要素として

①熱の生成（代謝アップ：ウォーキング、ジョギングなど）、

②全身可動性のアップ（関節や筋をターゲットに低負荷全身エクササイズ：ランジ、クアドストレッチなど）、

③筋腱活性エクササイズ（使用する筋肉に直接アプローチ。低負荷を避け、回数をコントロール：スクワット、チューブトレーニングなど）

④動的な可動性エクササイズ（静的→動的へ。競技特性を考えながら行う：股関節、ツイストなど）

⑤クイック動作のエクササイズ（④よりスピード、う爆発的動作を上げる）

⑥ショートラン、スプリント（ダッシュなど）

がある。

19:40 諸連絡・解散

9月15日（日）

8:30 集合

10:00 試合実践④ U18 プリンスリーグ北海道 帯広北高校 VS 白樺学園高校

R：高橋 AR1：小松 AR2：田口 4th：牧田



自己分析：前日のフィードバックを受け、選手のプレーの意図を意識しながら試合を行った。試合の開始直後に競り合いで後ろから押したズルさを感じたプレーをファウルでとれたのはよかった。マネジメントでは、選手に注意するときに、足を止めて向き合って注意することで周りにも注意をしているということを伝える工夫をする必要があると感じた。カウンター時にはどのように動くのかを迷ってしまい争点から離されてしまうことがあったので、カウンター時にはどこにでも行けるような走るコースを選択できればよかった。

INS 分析：判定基準、警告の基準は妥当ではあったが、ベンチから声が上がってから警告を出しているようにも見えるシーンがあったので、カードを出すタイミングには気を付けてほしい。帯広北のポゼッションでの動きとポジショニングが整理されてて問題なく動いているが、並走や縦位置の関係になりそうなときは、レフェリーサイドに開いて監視することによって全体が監視できるようになって、副審のフラッグアップを見逃すことが減る。汗のぬぐいすぎは、精神的なダメージがあるようにも見えるので、工夫する必要がある。

12:00 昼食・移動

13:00 試合振り返り

14:00 講義

伊藤インストラクターより、JFL 担当審判員に求められる資質（コンピテンシー）についての講義があった。アセスメントレポートにある、A. 競技規則の解釈と適用、B. マネージメント、C. パーソナリティ、D. ポジションと動き、E. チームワーク それぞれの項目ごとに説明があった。



15:00 諸連絡・解散